

日本語の特質

金田一 春彦 *Haruhiko Kindaichi*



76

NHK BOOKS

[617]

外国語を柔軟にとりこむ言語

発音・表記・語彙・文法などの領域別に日本語の性格を分析し、他の言語には見られないその特質を、身近な例をあげながら明快に説く。



NHK ブックス 617 時代の半歩先を読む



日本語の特質

金田一 春彦 *Haruhiko Kindaichi*

76

NHK BOOKS

[617]



金田一 春彦——きんだいち・はるひこ

- 1913年 東京都に生まれる
- 1937年 東京大学文学部国文学科卒業・文学博士
東京外国語大学教授・上智大学教授・名古屋大学教授・
NHK放送研修センター評議員などを歴任
- 2004年 5月没
- 著 書 『日本語』『日本語の方言』『日本語音韻の研究』
『国語アクセントの史的研究』『日本人の言語表現』
『新日本語論』『童謡唱歌の世界』『ことば歳時記』ほか。
- 編 著 『新明解古語辞典』『学研国語大辞典』（池田弥三郎と共編）
『日本の唱歌』（安西愛子と共編）

NHKブックス [617]

日本語の特質

1991(平成3)年2月20日 第1刷発行
2007(平成19)年7月20日 第33刷発行

著 者 金田一晴彦

発行者 大橋晴夫

発行所 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町 41-1 郵便番号 150-8081

電話 03-3780-3317 (編集) 048-480-4030 (販売)

<http://www.nhk-book.co.jp> 振替 00110-1-49701

[印刷] 啓文堂 [製本] 二葉製本 [装幀] 倉田明典

JASRAC (出) 第9011607-616号

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

ISBN978-4-14-001617-6 C1381

目次

はしがき

序章 日本語の性格を知ることとは 7

I 世界の言語と日本語 17

1 日本語と日本人 17

2 日本語の複合性 26

3 日本語の孤立性 36

II 日本語の発音 48

1 日本語の拍の数 48

2 母音と子音の組み合わせ 58

3 アクセントの問題 70

III 日本語の表記 84

1 文字の使い分け 84

2 漢字の性格 93

3 漢字の用法 104

IV	日本語の語彙	115
----	--------	-----

1	語彙の数と体系	115
2	自然を表す語彙	125
3	生活を表す語彙	136
4	人間に関する語彙	146
5	家と社会に関する語彙	154
6	単語の出来方	166
V	日本語の文法	178

1	日本語と精密な表現	178
2	日本語と言葉の能率	189
3	日本人の物の見方	198
4	日本語の規則性	208
5	敬語表現の本質	218
VI	日本人の表現	229

1	日本人の心づかい	229
2	日本語と勘	238

は し が き

本書は、私が昭和五十五年四月から九月まで、半年に亘ってNHK教育テレビのNHK大学講座のヒトコマとして、「日本語の特質」という題で放送したものを活字化したものである。一回きりで消えてしまうはずの話が、まず日本放送出版協会の好意でNHK「市民大学叢書」の一冊として残り、さらに今度NHKブックスのシリーズに入れられて再度お目見えすることは、嬉しいことである。

はじめにこの講座の題であるが、私は、日本語で見られる注意すべき性格を、部門別にしゃべっていったものだった。「日本語の特質」という題は、本来「日本語だけに見られる性質」という意味で、おこがましい感じがするが、放送のときにNHKの担当者からこの題を与えられ、この本でもその題がいいと言われる。羊頭を掲げて狗肉を売る罪は慎しんでおわびする。

ところで、この本の内容は、紙幅を是非この程度でとめてという出版社の懇請で実際の放送のときより大分減らしてある。「日本語の近代性」「縦書きと横書き」「日本人の愛用語句」の三回分は全面的に割愛し、その他の回のものも具体的な例など一部を削った。

放送したときには、不注意・不勉強から間違ったことをしゃべって、お叱りを受けたことも多い。この本では極力注意して訂正した。そのうちの一つ、今の日本語にある無生物を主語とした受動態というのは、欧文脈の影響によるものだと言ったところ、玉名市にお住まいの後藤克巳氏から、古典にかなりの例が発見できることを教えられたのは有益だった。

話題のうちで一番たくさんの反響のあったのは、発音の話の中で、日本語でミュのつく言葉はオ

オマミユウダという苗字しかない、と言ったときで、多くのかたから、どここの方言にはこういう単語があるというお教えを受けた。が、あの折は、私は日本の標準語について述べたので、方言は考慮の外だった。もし方言を考えるならば、日本語の母音は五つだとも言えないはずである。

もう一つ、これも発音のときに述べた円周率の覚え方について、大牟田市にお住まいの松尾清氏から次のようなのを教わった。まことに見事な出来なのでここに紹介しておく。

産³医¹師⁴異¹国⁵に向²う。産³後⁵厄⁸無⁹く、産³婦²御³社⁴に。虫⁶散⁴々³闇⁸に鳴³く。……

一体私はテレビで歌や音楽の放送をしたときは、多くのお手紙をいただき、新聞でもほめていただくことがあったが、言葉、日本語についてしゃべって、今度のように評判をとったのは初めてである。まことに冥利に尽きたことである。お聞き下さったかたがたに衷心御礼申し上げます。

また、最後にあたり、このような本が出来ることについて、放送の折お世話頂いたNHK社会教育部の立松昭子さんほかのかたがた、私の放送をテープにとって提供して下さった武蔵野市の宮本恵都子さん、速記を仕上げられた松下邦子さん、本の形にまとめられた佐藤鐸二さん、それからNHKブックスの一冊に御採用いただいた品川高宣さんにも深甚の感謝の意を表する。

平成二年十一月御即位式の日に

金田一 春彦

目次

はしがき

序章 日本語の性格を知ることとは 7

I 世界の言語と日本語 17

1 日本語と日本人 17

2 日本語の複合性 26

3 日本語の孤立性 36

II 日本語の発音 48

1 日本語の拍の数 48

2 母音と子音の組み合わせ 58

3 アクセントの問題 70

III 日本語の表記 84

1 文字の使い分け 84

2 漢字の性格 93

3 漢字の用法 104

IV 日本語の語彙

- 1 語彙の数と体系 115
- 2 自然を表す語彙 125
- 3 生活を表す語彙 136
- 4 人間に関する語彙 146
- 5 家と社会に関する語彙 154
- 6 単語の出来方 166

115

V 日本語の文法

- 1 日本語と精密な表現 178
- 2 日本語と言葉の能率 189
- 3 日本人の物の見方 198
- 4 日本語の規則性 208
- 5 敬語表現の本質 218

178

VI 日本人の表現

- 1 日本人の心づかい 229
- 2 日本語と勘 238

229

序章 日本語の性格を知ること

どういう効果があるか

私の勤めている上智大学というのは私にとって大変ありがたい大学で、ここにはたくさんの方の外人の言語学者がいらっしゃる。そのかたがたがまた日本語がペラペラなので、私は外国語は何もできないのですが、ちっとも恥ずかしくなくそういうかたがたとお話ができてまして、いろいろ外国語についてお話を聞かせていただく。そうしますと、日本語というものはどういう言語かということ、その性格といったものがわかってきたような気がするのです。ここでは、まず日本語の性格を知ること、どういうプラスがあるかをお話したいと思います。

第一に、日本語をじょうずに使う方法を勉強することになります。たとえば、小学校の国語の授業では、「犬」という言葉がありますと、「い」と書き、「ぬ」と書くように教えます。「猫」というのは「ね」を書き、「こ」を書くと教えます。これは日本人にとっては何でもないことですが、このような教え方ができることは、日本語の大きな特色です。

英語ですと、犬のことはドッグと言いますが、この dog という言葉は一息に言ってしまう。私たちが英語を聞きますと、向こうの人は「ド」と言って、「ツ」とつめて、「グ」と言っているように思ってしまう。しかし、それは日本人がそう聞くだけであって、向こうの人は、犬は dog とい

アイウエオ

カキクケコ

サシスセソ

ガギグゲゴ

ザジズゼゾ

.....

う全体が一つの音であって、これをそれ以上こまかく分析して考えることをいたしません。

日本語はそれに対し、子どもでも「犬」という言葉は「イ」という音と「ヌ」という音からできている、ということがわかります。「いぬ」をさかさまにすると、「ヌイ」となる、こう思っております。英語ではそうはいきません。ドッグをさかさにしたらグッドになるとは思っていない。

皆さんは右のような表を「五十音図」という名前で小学校のときにお習いになったと思います。実際にはこのほかにキャ・キュ・キヨとかン・ツのような音もありますから、全部の数は五十ではなくて、私の勘定では一一二になりますが、日本語のすべての単語はそういう音の組み合わせでできているわけです。そうしますと、こういった音の書き表し方を覚えてしましますと、日本語は何でも書けるわけです。日本語ぐらい、文字で書きやすい言葉はちよつとない、ということになります。英語の方は、ドッグでも、あるいはキャットでも、そういった単語ごとに書き方を覚えていかなければならない。これは日本語と英語との大きな違いであります。

日本語の効果的な

使用法がわかる

その次に、日本語は、自然に書いていった場合に意味がはっきりわかりにくい、ということがあります。たとえば、こういう文章があつたと思います。

知事は自分に所属するすべての局のすべての部のすべての課の職員がいま何をしているかを常に承知していなければならない……

こう読んでくると、知事というのは大変だなと思えます。ところが、最後まで読みますと、

……承知していなければならないわけではない。

なんて書いてあることがあります。なアんだ、ということになる。これは、日本語では、その文の肝心の打消しの言葉が最後にあるからです。英語だとこういうことはない。"A governor need not..." のように not というのが早くきますので、知事は「……する必要がない」と、打消しの表現だとすぐわかります。

日本語にはこのような性質がありますので、最後に打消しがくるような場合には、早く、打消しがくるのだぞ、という予告をしておくことが必要になります。これは、しようと思えばできるわけで、「知事といっても必ずしも……」

とか、あるいはもっと親切に、

「知事の仕事といってもそれほど大変なものではなくて……」

とかいう注意をしておけば、あとになって「常に承知していなければならないわけではない」と言っても、読み手をがっかりさせることはありません。

日本語にはそういう性質があるものですから、日本語であまり長い文を書きますと、一体、何を言いたいのか、はっきりわからない、といったことが起こります。たとえば、久保栄さんの『火山灰地』という作品は、このようにはじまります。

先住民族の原語を翻訳すると／「河の岐れたところ」を意味するこの市^{まち}は／日本第六位の大河とその支流とが／真二つに裂けた燕の尾のやうにその一方の尖端で合流する／鋭角的な懷ろに抱きかかへられてゐる。

格調の高い文で宇野重吉さんなどじょうずに朗読されますが、書いたのを見て一体これは何を言いたのかということがちよつとわかりにくいと思います。

つまり、このような場合には、「この市は」という言葉を一番先に出した方がよさそうです。そのあとで「先住民族の原語では河の岐れたところを意味するが……」と言った方が、わかりやすい。そういった配慮が、日本語の場合に必要であります。

日本語の書き表し方

日本語の大きな特色としまして、日本の文字——漢字と仮名で書かれた新聞の記事は、大変理解しやすい、ということがあります。これは、つまり、漢字と仮名の使い分けが、日本語の場合、その性質が絶妙なのです。たとえば皆さんがご承知の「知床旅情」は、

知床の岬に ハマナスの咲くころ 思い出しておくれ 俺たちのことを……

という。ここでは「知床」とか「岬」とか意味のうえで重要な言葉は漢字で書かれている。ですから、漢字をたどっていけば意味が早くわかる、ということがあります。次のようなものは、一層それがはっきりします。

十一時に京都に着くから迎えを頼みます

これを電報で打つ場合どうするか。少しでも儉約しようとする人は、仮名の部分を略し「十一時 京都着、迎え頼む」という文にします。つまり、それほど重要でないところは仮名で書かれているということになる。このようなことから、われわれは、新聞をまず開いた場合に、その漢字だけ拾っていけば大体の意味がわかる。

日本語には、こういうような性格がありますから、漢字と仮名の使い方がちよつとくるいいますと意味がはっきりとれなくなります。たとえば、こんな例があります。

どんなさ細なことでも親切が感じられる。

このときに「さ」と平仮名で書いてありますと、「どんなさ……」——「どんなさ」という言葉はありませんが、上の言葉にくっついてるように思われる。ですからこのような書き方は望ましくないわけで「どんな小さなことでも」とか、「どんなつまらないことでも」と言い換えた方がいいわけです。

「天下を征服しては者になる」は一層わかりにくい。「天下を征服しては、者になる」ではないのです。これは「天下を征服して覇者^{はしや}になる」と書くかと思ったのに、「覇」という漢字は当用漢字になかったものですから、こう書かざるを得ないのですが、こうなりますと、「覇者」という言葉はよくない言葉なのでしょうか。しかし、「覇」という字は、「制覇」とか「覇権」という言葉がありますから、漢字を生かした方がいいようです。今度の常用漢字に入れようとしているのは、結構なことです。

外国語の勉強に役立つ

このように、日本語をじょうずに使う方法を考える場合に、日本語の特質を明らかにすることが必要ですが、同時に日本語の性格を知ることとは外国語の勉強に役に立つのです。これが日本語の性格を知ることの第二の目的です。つまり、日本語と外国語とはいろいろな点で性質が違う。うっかり、日本語のとおり^{どおり}に外国語をしゃべってしまうと、これがいけない。たとえば、「きようはあたたかいですね」と言いますが、これをそのまま英語にして「Today is warm.」と言ったのでは英語にならない。

よく、こんなことがあります。私どもが食堂に行きますと、給仕の人が「こちら何になさいですか」と言う。そうしますと、「ぼくはウナギだ」なんてことを言います。これは元来おかしい言い方です。その人はウナギを食べに来たのであって、ウナギそのものではありません。しかし、給仕

の人は笑いませんね。かしこまりましたと言って、ちゃんとウナギ飯を運んで来て、「ウナギはどなたでしょうか」と言っている。そうすると、注文した人は、「おう、おれだ」とか言ってもらって食べている。

このような言い方は、論理的でないと言われます。短縮した言い方であります。これを英語にしまして I am an eel. と言ったら、おかしいか、驚くか、どっちかになるでしょう。

民放のコマーシャルにこんなのがありました。「缶ごとぐつとお飲み下さい」。そうしたら文句をつけた人がありました。「缶ごと飲んだらノドへつかえてしまうじゃないか」。しかしこういう言い方は日本語に普通です。この間も私の家族のものが、「あそこのおスシ屋さんおいしいわよ」と言いました。私は早速「おまえはスシ屋の店をかじるのか」と言ってやりましたが、相手は妙な顔をしていました。

日本語の教授にも

これを逆に解しますと、今度は、日本人が外国人に日本語を教える場合、やはり、日本語の性質をわきまえていなければならぬ。たとえば、日本語には、「山が見える」という言い方と、「山は見える」という言い方とがあります。主格を表す助詞が二つある。この違いは非常に難しいのです。「が」と「は」の区別は、韓国の人はできますが、中国人にとってはやや難しい。ヨーロッパの人にはなおさらです。この区別が理解できないために、よく誤解が起きます。たとえば、日本人はこういった言い方をすることがある。

電車が遅れているようだけれども、もう来るでしょう

「もう来る」のは誰がでしょうか。外国人に尋ねますと、ヨーロッパ人は、まず「電車が来るのだらう」と思ってしまう。ところが、そうではありませんね。日本人の場合は、「待っている

人が、もう来るでしょう」との意味に解釈します。つまり、日本語の場合には、「電車が」という言葉は「遅れているようだけれども」までしか続いて行く力を持っていないのです。ですから、もし「もう来るでしょう」というのが、電車が来るでしょう、という意味だったら、はじめから「電車が」とは言いません。「は」を使って「電車は遅れているようだけれども、もう来るでしょう」と言わなければいけません。

こういった微妙な使い方はヨーロッパの言葉にはありません。これは水谷修さんという日本語教育で権威のかたの本にあがっている例をいただきましたが、こういったことは、日本語の重要な性格の一つであります。

日本語の短所を矯め、長所をのぼす

日本語には、長所と同時に短所があるに違いない。その短所を矯めて、日本語をより使いよい言語にしたい、ということのをわれわれは考えていいと思います。それには外国語と比較して日本語の性格を知ることが大切です。

日本語についてよく言われる批評は、日本語は難しすぎる、ということです。これは、外国の人が習うのに難しいばかりではなく、日本人にとってもやっかいなのです。たとえば、石黒修さんというかたが統計をお出しになりましたが、その国の人がひと通り読み書き能力を身につけるのに何年かかるかという問題です。イタリアでは短くて二年でいいそうです。ドイツは三年、イギリスでは五年かかるそうです。そうして日本はどうか。八年かかる、と言っておられます。が、果たして、どうでしょうか……。当用漢字をマスターするのも、義務教育の期間だけではとうてい無理ですし、大学を出ても十分に使いこなすまでにはいきません。

私などは、国語の先生だと偉そうに言っておりますが、漢字の使い方というのはやっかいで、と

まどうことがしばしばです。たとえば「ツイキュウスル」という言葉が三つありますが、「利潤をツイキュウする」のときは「追求」が正しい、「真理をツイキュウする」と言った場合は「追究」が正しいと辞書に書いてあります。さらに、「追及」という言葉があつて「責任を追及する」と言うように使い分けると書いてあつてまことにまぎらわしい。また「ロテン」というものがありますね。今はちよつと少なくなりましたが、おもての通りなどに並ぶアレです。あれは「露店」と書いていいわけですが、ところがその露店を開いている商人のことは「露天商」と書きます。これは「露店商」でよさそうですが、露天で商う人という意味で、露天商と書かなければいけないのだそうです。こうなりますと、ほんとうに日本語の正書法は難しすぎるのですが、こういうことはどうしたらよいか、考えなければならぬ重要な課題です。

日本語の起源・系統を明らかにする

日本語の性格を知ることとは、このほかに、日本語の起源・系統を知うだけでも、やはり役に立つはずです。

日本語の系統は一体どういう系統であるか、どこの言語と親類の言語であるか、というようなことは、学者も研究しておりますし、一般のかたにも関心の深い問題です。しかし、これを知るには、たとえば、日本語の性格のなかで、変わりにくい性格は何か、ほんとうに日本語らしい性格は何であるかを極めて、同じような性格を持った言語がほかにあるならば、その言語と系統が近いだろう、というように考えるのがよいと思われます。

よく言語学に素人のかたは、単語が似ている、だからこれは関係がある、と結びつけてしまうことがあります。イタリア語などは日本語と発音全体が似ています。たとえば、「たくさんの」ということをイタリア語で tanto (たんと)、「たくさんのお金」というのは「たんと・だなある」とい